【学会レヴュー】

東 京 湾 学 会

── 富津岬の海浜植物と戦争遺跡探訪会に参加して ──

髙 橋　　克

東京湾学会は，東京湾とその周辺域における人・自然・文化について，既存の専門分野を超えた新たな総合的学問領域をめざしつつ，学び，探求し，そして東京湾周辺域の将来を展望する大きな核となることを目標とする学会である。その普及事業の一環として，総会を始め公開の東京湾学セミナー（年 2 回），東京湾学探訪会（年 3 回）を実施している。

今回，2007 年 12 月 9 日（日）に東京湾学探訪会の「富津岬の海浜植物と戦争遺跡」が千葉県富津市富津の富津公園を中心に開催された。その概略を報告する。

富津岬は東京湾を南北に二分するように突き出た半島状の砂州である。ここは古くから軍事上の要衝で，文化 7 年（1810）江戸防備を命じられた白河藩主松平定信が砲台を築き，明治時代以降は首都防衛上の重要地とされ，富津岬の基部にあたるところには元州砲台が，先端海中には第一海堡，第二海堡，第三海堡が築かれるなど要塞地帯として，昭和 20 年（1954）まで一般人の立ち入りが禁じられていた。

そのため，自然のままの植物群落が残されたとされる。富津岬の南北両岸は植生が異なり，北側は内湾性の植生で，南側は外洋型の植生群落になっていて，この特色ある植生配置により県の天然記念物となった。

探訪は，現在は公園として整備されている元州砲台跡から始まり，大砲や機関砲，小銃，機関銃などの命中試験や耐久試験を行った射入庫や，監視所などを巡りながら途中，白河藩領の時の陣屋跡と思われる小高い場所に建立されている昭和天皇の歌碑と「昭和天皇御手植の松」を見て岬の北側の海岸に出る。

海岸では多くのレジャー客の車が入り込み，水上バイクやパラサーフィンなどなどを楽しんでいる。沼田眞博士（故人，東京湾学会初代会長）による，昭和 22 年当時の植生調査に見られるような内湾性植生群落がこの車両進入によって減少して来ていることが紹介された。このあと昼食を挟んで，明治百年記念展望台から富津岬を俯瞰し，南側の海岸へ向かった。

南側の海岸もやはり車両の進入で外洋型植生群落が減少していたが，地元住民の働きかけによって 5 年ほど前から車両の進入を規制しており，植生群落が徐々に戻ってきているとのことで，ハマイチョウの黄色いたんぽぽのような花が印象的であった。

この南側の海岸近くには，日本武尊が東征の折りに浦賀水道を相模から上総に渡ろうとしたが海が荒れて渡れず，その荒れた海に弟橘姫が入水し，日本武尊は無事浦賀水道を渡ることができた。海を鎮めた弟橘姫の着物の袖が流れ着いたことを顕彰した石碑があり，その横に新たに第二次大戦終結後連合軍が初めて日本本土に上陸した地であることを記した看板のもとに案内された。

さらに，富津岬周辺で盛んな海苔養殖の基地である下州漁港で現在の海苔養殖の様子の説明を受けた。その後，富津市立埋め立て記念館で富津の漁業に関する資料の展示を見学した。

今回の探訪会では，東京湾に突きだしている富

津岬の歴史と特徴ある海浜植物群落の現状が実感できた。なかでも首都防衛上の要塞地帯だからこそ残された貴重な自然を，国定公園化された現在にあって，保全することの困難さの皮肉は痛切で，東京湾岸に息づく三番瀬を初めとした谷津干潟，盤州干潟などの貴重な環境の保全の難しさにも心が及ぶ探訪会であった。